

Title	ミュンヘンで発見された「オットー・バウムガルテンによるヴェーバー夫妻の結婚式説教」をめぐって
Author(s)	Friedrich Wilhelm Graf 深井, 智朗・津田, 謙治・小柳, 敦史 / 訳
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.51, 2012.1 : 235-259
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=4205
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

ミュンヒェンで発見された「オットー・バウムガルテンによる

ヴェーバー夫妻の結婚式説教」をめぐって

フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ

深井智朗＋津田謙治＋小柳敦史 訳

《訳者解題》

二〇〇八年九月にミュンヒェン大学のフリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ教授はバイエルン州立図書館に所蔵されているマックス・ヴェーバー＝シエーフアーの遺品の中からマックス・ヴェーバー夫妻の結婚式で、ヴェーバーの従兄弟の神学者オットー・バウムガルテンが語った説教原稿を発見した。本論はこの原稿の発見者であるグラーフ教授による解説論文の翻訳である。初出は以下の通りである。Friedrich Wilhelm Graf (Hg.), Otto Baumgartens Predigt zur Trauung von Max und Marianne Weber, in: *Journal for the History of Modern Theology/Zeitschrift für Neuere Theologischesgeschichte*, 16 (2009), 276–291

訳者たちが受け取った『近代神学史時報』に掲載されたテキストには編者であるフリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ教授によって、今回発見されたバウムガルテンの説教原稿だけではなく、ヴェーバー夫妻の

家族史と結婚に至るまでの詳細なドキュメントが付されていた。発見されたテキストの方はオットー・パウムガルテン「マックス・ヴェーバー夫妻の結婚式での説教」という題で『思想』二〇一一年第七号（岩波書店）に翻訳し、掲載されている（二三九〜一四八頁）。グラーフ教授の解説の方は長編で、発見されたテキストの解説であることを超えて、ヴェーバー夫妻の家族史、結婚史についてのひとつの研究論文になっているので、グラーフ教授とも相談の上、ここに発見されたテキストとは切り離して翻訳することにした。『思想』に掲載されたパウムガルテンのテキストとあわせてお読みいただきたいと願う。

（訳者による補語は「」を付して表記している。）

（深井智朗）

〔家族史、あるいはマックスと会うまでのマリアンネ〕

マリアンネ・ヴェーバーは彼女が書いたマックス・ヴェーバーの『伝記』のひとつの章、すなわちその第六章を「結婚」にあてているが、そこで彼女は、一八九三年九月二〇日にトイトブルクの森にある村、エールリングハウゼンの教会で行われた（彼女とマックス（子）との）結婚式についても短く報告している。この箇所ですぐマリアンネは、エールリングハウゼンでの彼女の家族史について、また母方の裕福な祖父であり、ベルリン市参事会員であったマックス・ヴェーバー（父）の長兄であるカール・ダーヴィット・ヴェーバーの商才について詳しく記している。マリアンネの母、

アンナ・ヴェーバー・シュニトガーはリネン工場を經營していたカール・ダーヴィト・ヴェーバーの長女であつたが、まだ二十代であつた一八七三年、すなわちマリアンネを産んで三年後に産褥のため亡くなつていた。マリアンネの父、エードゥアルト・シュニトガーは開業医であつたが、妻の死以来精神的にかなり不安定な状態にあつた。ある時は抑鬱状態に、ある時は被害妄想に悩まされた。そのため彼はこれ以上マリアンネを育てることができなくなつてしまい、幼いマリアンネは、レムゴに住む父方の祖母であるドレッテ・シュニトガーのもとに預けられることになつたのである。そしてそこで、祖母と教師をしていた未婚の叔母に育てられ、その地で教育を受けることになつた。そこでの暮らしは小市民的で質素なもので、エールリングハウゼンのヴェーバー家の裕福さとは対照的であつた。しかしマリアンネは以前から〔祖父である〕カール・ダーヴィト・ヴェーバーと親しい間柄にあり、彼もマリアンネを実の娘のように扱つてくれていた。カール・ダーヴィト・ヴェーバーの〔経済的な〕配慮によつて一八八七年から二年間、マリアンネはハノーファーにある女子寄宿学校に通うことになり、一八八九年には家事手伝いとして彼女の母方の親戚であるヴィナとアルヴィネ・ミュラーが夫ブルーノとエールリングハウゼンに持つ家庭へと迎えられたのである。ヴィナはカール・ダーヴィト・ヴェーバーの末娘である。二一歳の若きマリアンネは一八九〇年から一八九一年にかけての冬にクリスマスと新年を過ごすために六週間ほどシャルロットテンブルクの〔マックス・ヴェーバー〔父〕の家〕に招かれた。そこで彼女は六歳年上の〔戸籍上は〕叔父にあたるマックス〔・ヴェーバー〔子〕〕——彼はそのとき〔第二次司法試験に合格し〕上級公務員採用候補者〔Assessor〕であつた——によつて「生まれてはじめての舞踏会へ」連れて行つてもらつた。彼は「優しく彼女の世話を焼いてくれた」⁽¹⁾。

しかしマリアンネは、東ヴェストファーレンの片田舎においては自分が駄目になつてしまうのではないか、他の多くの女子たちと同じように、自分の職業も意味ある仕事も持たず不満ばかりの独身女性になつてしまふのではないかという不安から、ベルリンに戻つて自分を磨きたいと繰り返し祖父に懇願したのであつた。彼女は「要求の多い文化人」にな

ることを欲したのである。⁽²⁾

〔マリアンネとマックスが結婚に至るまで〕

一八九二年の春にはこの願いは実現の方向へと向かった。四月二日にマリアンネはその画才を磨くためにベルリンに出ると、マックス・ヴェーバー(父)の家へと迎え入れられ、彼の妻ヘレーネがマリアンネを実の娘のように世話してくれた。そしてマックス(・ヴェーバー(子))はマリアンネと再会し、自然にマリアンネは彼に心惹かれることになった。「一年半を隔ててはじめてアセツソルに再会したとき、娘には自分の立場がどんなものであるかがすぐわかったし、自分の愛情に気づくものが一人もいないあいだしか自分は彼のそばにとどまれないということもわかった⁽³⁾」。マリアンネにとってヘレーネは家の中の女領主であると同時に母親代わりであつたばかりではなく、彼女にとって一番大事で信頼できる人であつて、年若い姪孫は彼女に対して早くから心からの親近感を示していたのだが、ヘレーネは全く違う計画を思い描いていたのである。ヘレーネが望んでいたのは、マックスの一番の親友であつたパウル・ゲールとマリアンネが婚約するということであつた。ゲールは労働者の味方としてよく知られた神学者、社会活動家であり、一八九一年から一八九四年にかけて福音主義社会協議会の事務局長を務めた人物でもある。マックスとパウル・ゲールはこの時期——おそらくは一八九二年六月の終わりから——東エルベ地方の農業労働者の状況についての私製アンケートのための調査用紙作成に取り組んでいた。この調査用紙は一八九二年から一八九三年へと年が代わる頃に帝国内のおよそ一万五千人のプロテスタント教会の牧師へと送付された。送付を受けた牧師のうちのおよそ一〇パーセントから返信のあつた報告は、ヴェーバーの評価によれば「あらゆる予想を越えるとても上質⁽⁴⁾」なものだつた。一八九三年の間に彼らは、寄せられた回答の整理のために何度も顔を合わせる事となつた。そのような中、一八九三年一月一日にパウル・ゲールはマリアンネに求婚したのである。ヘレーネはそのことを知つていたし、明らかに応援していた。また

マックスにも遅くとも一月九日にはこの友人の計画は知らされていた。⁽⁵⁾しかしマリアンネがゲーレの求婚を断り、マックスへの愛を告白すると、二人の女性の間には厳しい対立が生じ、この対立の中でヘレーネはマリアンネに、実はマックスはこの数年来エミー・バウムガルテンと恋仲であるということに注意を促したのであった。エミーはシュトラスブルクに住むマックスのいとこで、ヘレーネの一番上の姉であるイーダと著名な歴史家であるヘルマン・バウムガルテンの娘である。しかし、少なくとも『伝記』におけるマリアンネの叙述によれば、彼女自身は以前からこの二人の関係を知っていた、ということになっている。マックス・ヴェーバー（子）は一八八三年から一八八四年にかけてシュトラスブルクにてニーダーシュレージエン第二歩兵連隊の一年志願兵として兵役についており、一八八五年に軍事訓練を修了したのであったが、確かにシュトラスブルクに滞在中、ヘルマン・バウムガルテンとその家族と親密な関係を持っていたし、もちろん、敬虔でカルヴィニズムの伝統を大切にし、道徳的に厳しいイーダとも叔母として知遇を得ていた。イーダは子どもたちの自我が発達していくことにさまざまな制約を課し、夫の政治的リベラリズムについてもほとんど理解することができなかった。シュトラスブルクにおける二度目の軍事訓練の最中に（一八八五年に分隊長へと昇級していたヴェーバーはこの間に後備軍の中尉へと昇格している）ヴェーバーは一歳年下のエミー・バウムガルテンと気持ちの通い合う親密な仲となったのであった。エミーは狂わんばかりに彼を愛し、後には婚約を交わし夫婦となることを望むようになっていた。イーダとヘレーネの姉妹もまた、エミーとマックスの最終的な関係についてお互いに知っていたようである。しかしヴェーバーがベルリンへ戻るとすぐにエミーは病気になるてしまい、繰り返し精神病院で療養することが必要になった。マックス・ヴェーバー（子）は、それほど愛情をかたむけてはくれない父であるマックスに経済的に依存していたので、彼は経済的な理由だけからしても、エミーと何らかの確かな約束をすることはできなかったのである。「両者の側の諦めは、愛ある関係の展開を窒息させたように思える」。⁽⁶⁾

マックス（子）の毎日の仕事の苛酷な状況によってもエミーとの関わりは断たれてしまった。一八九二年のはじめ

になつてようやくマックスは大学教授資格を得ることができた。いずれかの大学の講座への招聘がもたらされれば、彼はずぐに父親から独立する機会を得ることができるとは思つてゐた。こうしたことについてマリアンネが何を知つてゐたのかは定かではない。しかし彼女は伝記において次のように記している。「一八九二年秋、或る美しい保養地を第二の故郷としている女友達に五年ぶりであつたためにウェーバーは南部へ旅行した。(中略)彼がマリアンネにその話をしたとき彼女は、その女友達との間がどうなつてゐるかをはつきりさせるために彼が訪問したこと——そして彼が過去と手を切つて来たことを感じ取つた。彼女はまた、なぜほかならぬ今そのようなことをしたのかを彼女なりに考えてもみた。今や彼女の感情は暗い色を帯びた。彼女は実現の希望を抱きはじめての⁷だ」。

ところでマックスは、深く傷つき、大變憤激してゐるパウル・ゲーレにすべてを話さなくてはならなくなつた。そしてまたマックスは春のうちにもう一度、神経を病んでゐるシュトラスブルクに住むいとこ(であるエミー)に手紙を書いた。エミーの病氣にもかかわらず、マックスは自分が彼女と緊密に結びつけられてゐることを知つてゐた。またマックスは、イーダ・バウムガルテンとヘレーネの同意が無くてはマリアンネとの婚約と結婚が不可能であることもよく分かつてゐた。というのも、イーダは一八八八年八月に彼女の二人目の息子であるオットー・バウムガルテンに、ヘレーネのところに行き、一体いつマックスが正式に婚約をして所帯を持つことが可能になる見込みなのか、ということをはつきりさせるように依頼してゐたからである。オットー・バウムガルテンはいとこであるマックスととても親しいプロテスタント神学者で、その少し前にベルリンのルーメルスブルクにある孤児院の説教者の職についており、一八九〇年の復活祭にはベルリン大学で実践神学の分野の大学教授資格を得てゐた。イーダの依頼は、何らかの交流があり、家族からも期待されていながらも、明確には何らの約束もなされてゐないような結婚の約束という状況は、エミーというあらゆる点で弱く、人に頼らざるを得ない娘には、長く耐えられないのではないか、という当然の心配からなされたものであつた。「叔母に対する任務」の遂行、そしてこのような「デリケートな問題」について、オットーが母親に宛て

て書いた手紙での報告が、ギュンター・ロートによつて発見され、公開されている。そこには次のように書かれている。「マックスについてのその他のことは私には明らかではありませんし、彼の内的な立場について私は判断することはできません。ただ、私がよく分かっていることは、マックスは自分とは異なる個性を持った人に対して、そして私に対しても敬意を持つているということです。そのことはきわめて深い謙遜な態度に基づく理解を試みていることの証拠だということです。しかしいづれにしろ、彼にとつて問題であるのは、彼の将来を決定的に規定するようになる決断をなすということだと思います。しかしそれは彼の優柔不断がそうさせているのではなく、それは彼の良心の故だということです。私は、不審をもたらし、このような場合には遺憾ですらあるこの点について、あなたの見解に賛成です。しかしそれは必然的なものでも、永続的なものでもないように思います。彼の現在のどつちつかずの状態が、その特殊な要求の故に、彼の変わることのない意思決定となつてしまうようなことはないのでしょうか。ですから、この点からしても私は辛抱することを勧めます。私に対する彼の関係は誠実で確固としたものです。ですからエミーに対するマックスの気持ちが高まるとは私は信じてはいません」⁽⁸⁾。

実はマックスとエミーとの間ではどのような些細なことでも常に詳しく相談されていたのである。そのためマリアンネがベルリンの家族に迎え入れられ、マックスが——ヘレーネを通して——マリアンネの愛情を聞き知ると、マックスはそのことをエミーに知らせ、マリアンネとの関係に賛成してくれるようにと話をする決心をしなくてはならなかったのである。そして既にあの恐ろしい一月一日の一二日後⁽⁹⁾、マックスはマリアンネに一定の条件付きではあるが求婚していた。マックスはマリアンネに、かの有名な、そしていろいろと解釈が可能な手紙を書いたのであつた。そこで彼はマリアンネに対して、自分の「伴侶」になつてくれるよう熱く訴えた。「情念の怒濤は高く上り、ぼくたちの周囲は暗い。——気高い心の伴侶よ、ぼくと一緒に諦念の静かな海から荒海へ出て行こう、精神の苦闘のなかで人間が成長し、本質的なもの為人間の身から洗い落とされるころへ。しかしよく考えねばならない、海が荒騒いでいるとき

には船乗の頭と胸は明晰でなければならぬのだ。朦朧とした神秘的な精神的気分への空想的な耽溺をぼくたちは自分の心に許してはならない。なぜなら感情が高揚するときには、冷静な意識をもつて舵を取れるように君はそれを抑えねばならないのだから。ぼくとともに歩んでくれるならば、返事は書かないでくれたまえ。そうしたらぼくは、君に再会したとき、静かに君の手を握り、君の前で目を伏せたりはすまい。そして君も目を伏せてはいけない。「中略」そしてもう一度――、ぼくと一緒に来てくれ、ぼくは君が来てくれることを知っている^⑩。こうしてマックスとマリアンネは五月中に「秘密の婚約」に同意したようだ。つまり、まだ両親の賛成が、とりわけマリアンネの場合には決定的な影響力をもつた祖父であるカール・ダーヴィト・ヴェーバーの賛成が得られていなかったのである。この秘密の婚約についてマックスはオットー・バウムガルテンには打ち明けていたが、オットーはその際自分がこの若い二人の結婚式の司式をするだろうということを既にうすうす感じていたのだ。六月になり婚約が周囲の人々によって認められるまでには、なおさまざまな混乱や両家の間でのいくつものいざこざがあったのである。ギユンター・ロートはマックスの「第二等であるにせよ（マックスはカール・ダーヴィット・ヴェーバーの甥であり、マリアンネは孫になる）」、いとこ同士の結婚」を非対称的な関係と解釈している。マックスは「愛で結婚したわけではなかった。倫理的な責任の意識により動機づけられた結婚をしたのである。彼が結婚したのはどちらかといえば愛されたからであつて、彼が愛によつて駆り立てられたからではなかった。……マックスは決してマリアンネに求愛しなかつたに違いない。マリアンネがマックスを求めたのである」^⑪。

シュトラスブルクのイーダとベルリンに住むヘレーネという、幼い時から大変固く結ばれていたファレンシュタイン家の姉妹は、何度も手紙をやり取りすることでこのきわめて困難な状況を解明しようと試みていた。というのは、バウムガルテン家のやはり病弱であつたもうひとり娘であるアンナもまた、おそらくは一八九〇年の比較的長いベルリン滞在のうちにマックスに恋をしており、マックスはエミーの妹から寄せられたこの想いにも明確な返答をしていなかっ

たからである。ヘルマン・バウムガルテンは一八九三年六月一九日に亡くなるが、彼がたいへん高く評価していたマックス〔子〕とマリアンネとが結ばれることに對して、その死のほんの直前になつて彼ははつきりと祝福を与えていた。ヘルマン・バウムガルテンの埋葬にマックスは参列することができなかったが、それはエミーと顔を合わせるのを避けるためでもあつた。イーダがエミーに一月中に起こつたことについて伝えた後でヘレーネはシュトゥットガルトにエミーを訪ね、エミーがマックスの決断を内心では受け入れているという印象を得ていた。「そのためここにきて話は急展開することになつた。」ヘレーネは家族の多くの者が心を病んでいることを目の当たりにして、そしてとりわけ〔マリアンネの父である〕エードウアルト・シュニトガーの病を氣にして、マリアンネの健康状態についてもデトモルトの幾人かの親戚に情報提供を頼んだ。マックス〔父〕とカール・ダーヴィト・ヴェーバーの兄弟は婚姻契約について話し合ひを持ったが、このことはマックス〔子〕をひどく怒らせることになつた。なぜなら彼はこのことを、父による自分の問題に對する被後見的・侮辱的な介入だと感じたからである。それでもマックス〔父〕は、自らがマリアンネ（彼女は確かに莫大な遺産を相続するものと思われた）の財政的な後見人となる契約条項を押し通すことに成功した。彼はここで極度に父権的に振る舞つたのである。結婚式の二日前、すなわち一八九三年九月一八日に婚姻契約がエールリングハウゼン区の裁判所で結ばれた。

〔マリアンネとマックスの牧師としてのバウムガルテン〕

オットー・バウムガルテンもまたマリアンネについてのさまざまな情報を得ていたが、彼は一八九三年六月二六日になつて婚約を祝う手紙をマリアンネに送つた。オットーの手紙は次のように（もつとも、これは確かに他のものと並ぶひとつの解釈にすぎないが）解釈できる。すなわち、オットーの夫の親友であり、いどこでもあるマックスとマリアンネの間の距離が近いものとなり得るといふことを、オットーはかなり早い段階から認識していたといふことであ

る。次のように書かれている。「親愛なるマリアンネ。ぼくはもう長いこと、ぼくの愛するマックスに人生の幸せをもたらすに違いないと思っていたこの決定に対するぼくの関心と喜びを君に伝えたくてなりませんでした。君のあらゆる困難ななりゆき——その影響が君の喜びや活力をすっかり押しつぶしてしまっていないとよいのですが——を伴ったこの婚約のうち、ぼくは神の導きを見ています。君もぼくに同意してくれるものと思いますが、君の神は君を憐れみ深くお導き下さり、安らぎを得るために稀な方法を用いられたのです。ぼくはこの憐れみ深いお導きをとりわけ格別なものと感じておりました。第一には、父の臨終に際してです。父はまさしくこの婚約をまるで実の子の婚約のように考えておりましたし、君たちの婚約に対して、他の場合にはまず生じることのないようなあたたかい関心を持つていました。それから〔第二には〕、ぼくのあわれな妹たちを母とともにシュトゥットガルトに連れて帰った時にもそう感じました。その際にぼくの愛する〔妹である〕エミーが、ほんとうに心のこもった感謝と屈託のない誠実さをもって君たちの「判読不能」と間近に迫った結婚について話すものだから、ぼくが内心持っていたそれにまつわる疑念の全てが消えてしまったということです。そしてこの二重の祝福が君たちの幸せを完全なものとする、ぼくは確信したのであります。ぼくは〔この手紙のはじめに〕君に友人のような言葉で話しかけて良いかどうかをお尋ねはしませんでした。なぜならぼくの確信しているところによれば、マックスはぼくたちの親しい友人関係について君に詳しく伝えているでしょうし、ぼくたちはもはや他人として向き合っているわけでは決まらずに思っているからです」。そしてここに決定的な一文が続いている。これによつて、マックスとオットーがおそらくは早くからすでに、人並みはずれて扱いの難しい人間であるマックスにはエミーよりもマリアンネの方がはるかにお似合いなのではないかと話し合っていたことが認識される。「ぼくは当時かなりはつきりと君の人となりに興味を持っていたのです。そしてビーレフェルトの親愛なるメラー家に、あたかもぼくがすべてのことに感づいているかのようにして、このような認識がぼくにとつてさらに価値あるものとなり得るかどうか問い合わせたのでした」。この「当時」が正確にいつなのかは述べられていない。もしかす

ると一八九〇年八月からイエーナ大学神学部の実践神学定員外教授となっていたオットーが、母（あるいは両親）及びエミーの側とマックスの側の仲裁者の役を引き受け、友人のために、すなわちマックスの関心に基づいてマリアンネの情報を受け取っていた、ということなのかもしれない。いずれにせよ、オットーは婚約したばかりの女性に対し、女性に対する男性の優先の強調という家父長的な暗示がないわけではないにしろ、彼女の将来の夫が甚だしく複雑な人物であることをほのめかしている。「自立性とヴェストファーレンの特徴、すなわち自己主張や独自の意見を持つという若い時からの慣習がいまや、愛するものが持つ、卓越した認識力への従属と予断を伴った献身及び自己放棄と幸福な結びつきをなしとげますように！ とりわけぼくが君に望むことは、君の婚約者の複雑で多面性に媒介されている思考と知覚の様式に接する際に、君に訪れるまたとない幸運をできるだけ統一的に、力強く、思い悩むことなく受け取るということです。これと関連することですが、第三者への配慮のために秘密であった婚約に伴う困難な状況からすぐにでも解放されたいと、一週間前からぼくは願っていました。というのはぼくが思うに、マックスやぼくのような人間は生活上のさまざまな関係を簡単なもの、あるいは統一あるものとして十分に作り上げることができないからです。そうしますと、あまりにたくさんの関係や出来事が神経や心を疲れさせるほどにもつれあつてしまふのです。さて、君たちは残り少ない婚約期間をできるだけしつかり過ごすべきです。既に若輩者ではなく思慮深い人間となつた者に許されるように、展望や回顧を欠くことなく過ごすべきです。そして最後に今一度、母と兄弟たちとぼくを一つにしているこの輪の中へと迎え入れる、心からの親愛ある歓迎の挨拶をどうぞ受けとつて下さい。誠実なる君のいとこ、オットー・パウムガルテン」。

確かに短い婚約期間はマックスとマリアンネとの間のさまざまな緊張によつても刻印されていた。マックスはアンケートの評価という彼の仕事に集中していたが、ヘレーネが将来の嫁をその教養志向の故に非難したり、婚約者に対してどちらかといえば距離を取つたりする際にはマリアンネの味方をした。マリアンネはいまや、「夫の健康のことを委

ねられる前に」料理を覚えねばならなかった。「彼女が〈下着の秘跡〉を立派に引受け、家事の才をみごとに示し、日常生活を切り盛りして行けるかどうか家族のものは案じていた⁽¹³⁾」。マックスも気にかかることがあったが、それは彼女が「体力を増す⁽¹⁴⁾」ということではなく、それよりも本ばかりを読みすぎることであった。マックスはマリアンネが「世帯の範囲内では自分が彼に干渉されない支配権を得ていると感ずる⁽¹⁵⁾」ことを望んでいた。それにもかかわらず夏の終わりには、マリアンネはマックスを手伝い、農業労働者のアンケートのための調査資料の「抜き書きを熱心に」行った。「この種の仕事は彼女のものとされた。そしてなかんずく、この仕事は重荷を負わされた夫との連帯の一つの形式であった。彼女が夫と内的に繋がり、この飽くことのないライヴアル〔すなわち〕「学問」にひけを取るまいとすれば、彼女自身でできるだけ早く学問と親しまねばならぬように彼女には思えた。ヘレーネは喜ぶと同時に心配した⁽¹⁶⁾」。ヨアヒム・ラートカウの「身体史」的な伝記は、もちろんあまり説得力のない心理学的な憶測と、細かな数えきれないほどの誤りのために確固とした証拠を提供するものではなくないのだが、それでもその記述に従うならば、婚約期間にマリアンネが経験したのはどちらかといえば失望だった。つまり、仕事に取り憑かれた婚約者マックスはあらゆる愛情ある振る舞いを拒んだのである。⁽¹⁷⁾ 婚約契約が交わされた二日後の一八九三年九月二〇日に、ヴィナ・メラの別荘で結婚式が開かれた。「オットー・バウムガルテンが村の教会で二人を結ばせた。『愛はすべてを信じ、すべてを望み、すべてに堪⁽¹⁸⁾う』」。花嫁の父方の親戚も出席していた。花嫁の父エドゥアルト〔・シュニトガー〕はなおも重い病に苦しんでいたが、彼の上にも「誇らかな幸福の光がほのかに」差していた。「聾は好意と天才的な人間通ぶりを見せて彼の信頼をも得てしまっていたのだ⁽¹⁹⁾」。東ヴェストファーレンの「たくさんの家族を連れた商人たち」も参加していた。そしてもちろん花婿のシャルロットテンブルクの家族も参加したのである。「ヴィナは祝典を花で飾り、ヘレーネは多くのやさしい詩で飾った」。しかしまた遅しいユーモアもあった。結婚の祝福をおこなった同職の〈自由思想〉に異義を唱えたこの土地の正統派の牧師は、賀宴の席で十字架への信仰告白をおこなった（これは〈平信徒〉のなかに自分を数えている

人々を非常に満足させた。これに対しバウムガルテンは、〈神の愛する愉快な大食漢〉として、花婿である自分の友を称賛した⁽²⁰⁾のであった。

〔結婚式当日の様子〕

マリアンネ・ヴェーバーに対する新たな関心にもかかわらず⁽²¹⁾、そしてマックスについての新たな伝記的研究がいろいろと刊行されているにもかかわらず⁽²²⁾、結婚式の詳細についてはこれまでのところほんのわずかなことしか知られていない。クリスタ・クリューガーが二〇〇一年の著作『マックス・ヴェーバーと妻マリアンネ——結婚生活の光と影』において公開した婚礼写真が、実際に結婚式当日の若い二人を写したものであるということさえ確かな証拠は見出されないままなのである。なお、ギンター・ロートはこの上ない慎重を期して、この写真に「一八九三年頃⁽²³⁾」という日付を与えている。クリスタ・クリューガーによればこの写真の「新婚者たち」は「あまり幸福な印象を与えない」。「二人の若い顔には、妙にこわばったところが目立ち、喜びに欠け、いくらか反抗的で、あまり活気のない印象を与える⁽²⁴⁾」。しかしながら、この写真が結婚式の際に撮られたということには明らかな根拠に基づいて疑念が持たれている。

〔マックスとマリアンネの〕結婚式は一般に読むことのできる数少ない手紙においては幸福な新郎新婦のいるとても喜ばしい祝賀であつたと書かれている。マリアンネ・ヴェーバーも『伝記』の中でヘレーネから新郎新婦へと向けられた祝福の言葉の一つを引用している。他に知られていることとしては、マックスが可愛がついていた妹であるクララ、マックスの「クララちゃん」、「子猫ちゃん」、あるいは彼の最初の恋人（マリアンネは一八九三年にヘレーネに宛てて書いた手紙の中で彼女のことを「マックスの第一夫人」と呼んでいた）は、結婚式の際に兄を「ふざけてからかつた⁽²⁵⁾」。クララは次のように歌ってふざけたという。「おいてけぼり、おいてけぼり、わたしはおいてけぼり。わたしはきつと悲しくなるの。わたしは『第一夫人』だったのに」。結婚式の経過についても重要な資料は、ギユ

ンター・ロートによつて発見、公開された、オットー・バウムガルテンから愛する妹エミーへと宛てて書かれた長い手紙である。この手紙は結婚式の翌日に、エミーの理解と断念によつてはじめてマックスとマリアンネの結婚がそもそも可能になったことをはっきりと理解しながら書かれたものである。シュトラスブルクのバウムガルテン家からはオットーと彼の兄フリッツだけしか出席していなかったようである。イーダとアンナはイーダの夫、つまりアンナの父の死以後旅に出ることを欲しなかつたし、そうすることができなかったのである。エミーに宛てた手紙の中でオットーは次のように書いている。「ぼくがどれほど君のことを考え、君が来てくれていたらよいと思つていたかを君は理解してくれるでしょう。……ぼくにとつてのもっとも大切な出来事は、誠実で親愛なるぼくたちのマックスが祝宴のテーブルの上に立ち上がり、まずはぼくへの感謝の言葉を述べ、そして君たちのことを思い出させた時でした。君たちの輪の中で彼をはじめ、時間とは独立した人生の目標についての確信と、決して錆びることのない愛に対する感覚が開かれたのです。抑制のきいた話し方で、しかし簡潔でありながら深い思いを込めてマックスは語りました。ぼくの隣に座つていたマリアンネは、静かにぼくの手を握つていました。君たちからの愛のこもつた電報が読み上げられた時、ぼくたち三人はお互いに隣りに座つており、君たちはぼくたちの仲間であることを確信し合つたのです。それは比類なく美しく純粹なことでした。それは人が人間性への信仰を強くし、アンナの歌にならつて『誠実さがずつとありますように』と歌い上げるような瞬間でした」。その「素晴らしい祝祭の描写」においてオットー・バウムガルテンはホストの寛大さと「心のこもつた親切」についても賞賛している。「このヴェストファーレン的な家庭の詩情」。結婚前夜に恒例の騒ぎは、「あたかも自己目的であるときか思えないほどに手入れの行き届いたヴェーバー・ジュニア氏の宝石箱」、すなわちカール・ダーヴィト・ヴェーバーの息子であるカルロ・ヴェーバーの家で行われた。「どんな愚かな振る舞いも、どんななからかいも、どんな決まり文句も、みんなから尊敬される一人の叔母「アルヴィン・メーラー」が美しい歌声と金言によつてまさに全ての参列者の心の中へともたらした真面目で厳かな基調を邪魔することはありませんでした。そしてこ

の祝宴の間中、この共有された意識がぼくたちのマックスへと注がれていたのです。妹へ宛てた手紙の中でこの説教者は、彼自らが直面していると感じていたいくつかの難問についても言及している。おそらくオットーは「この結婚式での」説教を、彼が滞在していたと思われるこの地の牧師の家で書いたようだ。「そうしてぼくが牧師の隣に座り、この説教の原稿を書いていると、「彼は」神がぼくとともにあり、平安と神への感謝が、敬愛する君の魂と共にありますように、というのでした」。オットー・バウムガルテンは、自分が困難な状況の中で正しい言葉を見つけることができているかどうかということについて確信していたわけではなかった。「ぼくは確かに、自分に言葉が与えられるかどうかを心配していました。ぼくがこの原稿を完成させる前に、既に一〇時半になってしまいました。あまり多くのことに言及すべきではありませんでしたし、することはできませんでした。一般的になりすぎたでしょうか。事柄のキリスト教的な内容を省くべきではありませんでしたが、かといって強調すべきでもありません。素晴らしい魂の持ち主にはどんな苦い後味も免除されているのです。第一コリント第二三章七節以下の美しい文句は確かにぼくを楽にしてくれました。教会的な感覚と人々の心からの信頼がぼくを支えていました」。平穩の中で書き、語ることができるとは「自分の心があまりに動揺していた」ことについて、バウムガルテンはさらに弁明している。「しかし、まあまあでした」。オットーはエミーに自分の語ったことに対するいくつかの反応についても知らせている。「マックスは何の言葉も発しませんでした。マリアンネは静かにそのままの姿勢でいました。ぼくに感謝を伝えてくれた最初の人は叔父のマックス〔父〕でした。彼が一度ならずぼくに言ったことは、彼がぼくを忘れてはいないということでした。彼はそのことをテーブルに着いても話していました」。オットー・バウムガルテンはマックス、つまり「愉快な大食漢」についての事情も伝えている。『愉快な大食漢を神は愛する』という言及は、真面目さの大岩を乗り越える助けとなりました。しかし親愛なる一団はそれをも受けとめました。ぼくたちは静かに花嫁の早世した母に献杯しました。カール・メラーは、彼を実務的ではないけれども気持ちの良い人間にしているあの心遣いの天分をいかなんか發揮して、マリアンネの母に

ついて語りました」。バウムガルテンはさらに、出席していたたくさんの子どもの「子どもらしい愉快な歓声」について、そして婚礼から三日後の九月二三日には「参加者の一部をベテルのボーデルシュヴィンク施設団に」案内することになるだろうと書き伝えている。また彼は妹に「同封」したものについても語っている。それは彼女に「祝祭を体験させることになるはず」のもので、おそらくは当日の献立のカードか礼拝の席順が入っていたのだろう。そしてオットーは自分の説教原稿も送っていた。そして手紙の文末で再び、この祝祭の「成功」のために「君以上に貢献した人は他に誰もいません。君は誠実で無私な感覚でそれをなしたのです」と述べて、そのことを強調している。「これはマックス自身の言葉でした。神の恵みが君の上にありますように。そして君が弱っており、また職のない状態にあるとしても、君を愛する多くの人の故に君は祝福にあずかっていると信じていることを神が君に知らせて下さいように」。そしてこれに続く一文は、「今回発見された」結婚式説教がマリアンネのために書き写されたものであることを知らせている。「説教をすぐにクララー（・モムゼン、旧姓ヴェーバー。すなわちマックスの妹）へと送って下さい。彼女はこの説教をマリアンネのために書き写してくれるでしょう。もつともそのためには、この説教は文体の点で十分に良いものではありませんか」⁽²⁶⁾。

〔結婚式後のバウムガルテンとヴェーバー夫妻〕

この大きな一族全体のうちで誰が結婚式に列席していたかは明らかでない。ファレンシュタインの二人姉妹のそれぞれの家族から、すなわちヘンリエッテ・ハウスラートの家族とエミーリエ・ベネツケの家族から誰が出席していたのか、そしてヴェーバーの他の兄弟たちの家族から誰が出席していたのかをここで明らかにすることはできない。しかしながら「この時」多くの参加者には、この度の説教者（であるバウムガルテン）が彼の人生史における困難な状況に直面していたことが知られていたかもしれない。オットー・バウムガルテンはすでにゲッティンゲンでの数学期を終え

た後の研究期間中に、深い宗教性を持ったところであるエミリー・A・ファレンシュタインとともにイングランド南部の海岸地域にあるヘイリングへと旅行し、イングランドの親戚を訪れていた。「それはバウムガルテンと彼のいとこにとつて楽しい数週間であった。とはいえ旅行のあとにドイツで待つていたのは悪い知らせだった」⁽²⁷⁾。オットーの一番下の妹——彼女は他の兄弟たちから一人年が離れていた——が七歳の誕生日の四日後に猩紅熱で亡くなったのである。そして彼女をとりわけ可愛がっていた母は神学者である息子と姪になぐさめを求めている。またヘルマン・バウムガルテンはいつも自分の学問的な仕事へと没頭していて、妻と宗教的なコミュニケーションを取ることができていなかったということも、この事情に与つていた。「しかし宗教的な希望によつてイーダはオットーとエミリーに親しい感情を見出した」⁽²⁸⁾。こうして三人の宗教的な一致は以前よりも固く結ばれることとなつた。オットー・バウムガルテンが七歳年上の深くイギリス風に教育されたいとこと結婚を計画していることを父親に伝えると激しい議論になつた。その際にイーダは、エミリーの不安定さと病弱さを知りながらもエミリーが高い精神的能力を持つていて、オットーの側に立つたのである。ヘルマン・バウムガルテンの他にも、とりわけマックス・ヴェーバー（父）など一族の男性たちは、オットーの決心のうちに、一般的な市民にふさわしい愛ある家族生活に対するある種の諦めを見ていた。ヘルマン・バウムガルテンはいくらかためらつた後にこの結婚に賛同した。一八八三年一月九日にオットーの叔父ユリウス・ジョリーがアヒェルンのオーバーザスバッハで民事結婚式を遂行し、その後小さな礼拝堂で新郎の信頼できる友人であるシュトラスブルクの旧約学者ヴィルヘルム・ノヴァックが結婚式の司式をした。オットーはその後一八八三年夏より、フライブルクの北に位置する人口六百人ほどの小さな教区であるヴァルトキルヒの牧師となつた。一八八三年九月のことであつたが、わずか二日の間に、生まれたばかりの子とその母が死んでしまつた。オットーはこのことを破滅だと感じた。しかし、宗教的にも許容できない出来事——彼は何度もそれを理解し、受け入れようとしたが——に直面してしばしば起こることではあるが、あらゆるプロテスタント的伝統に反抗的な年若い男やもめは、未だ閉じられてい

ない墓穴のかたわらで大勢の人たちを前にもう一度自分の妻に語りかけようとしたのであった。オットー・バウムガルテンは二度と結婚することはなかったが、大学での仕事に戻った後でも、一族の中では「いわば」家庭付き牧師としての力を発揮し、一族の中で起こるさまざまな緊張関係や衝突を調停しようとする努力の連続であった。彼の調停的な気質はさまざまな方面でも称賛された。オットー・バウムガルテンは編集者であり、出版業を営むパウエル・ジーベックとも交友を深め、一九一九―一九二〇年にはパウエル・ジーベックとその息子たち（オスカーとヴェルナー）の間を首尾よく仲裁した。

オットーは新郎であるマックスと親密な友情を結んでいた。この友情はシュトラスブルクでのマックスの兵役の際に始まり、一緒に過ごしたハイデルベルクでの六か月の間にしつかり結ばれたように思われる。一八八二年の春から、第一次神学試験を合格したばかりのオットーはそこで半年間の説教者養成課程にあった。彼は毎日のように、その当時ハイデルベルクで法学を学んでいた六歳若いとこと会い、「フリードリヒ・」シュライアマハーの『宗教論』からダーヴィト・フリードリヒ・シュトラウスの『古い信仰と新しい信仰』に至るまでたくさんのプロテスタント神学に関する書物を共に読み、語り合ったのだ。一八八〇年代の終わりにマックスを社会政策に関わろうとするプロテスタント神学者たちの集団と結び付けたのもオットー・バウムガルテンであった。この神学者たちは一八九〇年には福音主義社会協議会に参加し、社会問題に対するプロテスタント教会の啓蒙を押し進めたのである。オットーは後にリアンネとも心情的にとっても近い友情を結んだ。リアンネの『伝記』についてオットーは、一九二六年にマルティン・ラーデの『キリスト教世界』に論評を書いた。ちなみにリアンネは一八九〇年以来『キリスト教世界』を講読していた。その論評においてオットーはマックスの「宗教的音痴」であるという自己解釈を相対化し、友人であると同時にいところであるマックスに、意味の探究に対する全く個人的で現世的な敬虔に満ちた厳格さを帰している。²⁹そして、戦争が始まったときの衝突にもかかわらずハイデルベルクの古い友人に葬儀に出て欲しいというリアンネの願いにエルンスト・ト

レルチがベルリンでの緊急の政治的な責務のため応じることができなかつた時には、オットーがそのためにミュンヘンへと向かつたのである。しかしマリアンネは意識的に非宗教的な式典を望んだため、宗教的な感受性を持つたオットーは傷つけられてしまった。オットーの代わりにエドゥアルト・バウムガルテンが葬儀に出ていたように一般的には思われている。確かに「マックス・ヴェーバー教授の火葬」についての無署名の新聞記事においてこう書かれているのである。「讚美歌の後に故人の甥であるバウムガルテン氏が弔辞を述べた」⁽³⁰⁾。しかし、この無署名の報告者がいとこと甥を思い違つた（そうするとオットー・バウムガルテンが弔辞を述べたことになる）のではないとしても、オットー・バウムガルテンは間違いなく葬儀に参列していた。一九二〇年六月三〇日にオットーは、一九一九年六月一三日に亡くなつた妻テークラを埋葬したパウエル・ジーベックに⁽³¹⁾、マックス・ヴェーバーの死に際しての弔意の手紙への感謝を伝えていく。「親愛なる友へ。わたしにとつても心の痛むことですが、わたしのいとこ——彼にはまだたくさんのお話をわたしは期待してました——が亡くなつたことに對する君の心のこもつた言葉に幾重にも感謝いたします。どんなに風変わりな埋葬だつたかは、隣人があなたに報告してくれたことでしょう。もしわたしがその際に、一年前にベルリンから旅立たなくてはならなかつた時の別れを思い出したとしても、宗教的な式典の放棄とあらゆる風習への配慮のなさがわたしを傷つけるのです」⁽³²⁾。パウエル・ジーベックはバウムガルテン宛ての返事を七月三日に書いている。「ヴィルブラントは確かに、マックス・ヴェーバーの埋葬の風変わりさについてわたしに教えてくれました。マリアンネ夫人はすでにたびたびわたしに手紙を書いてくれます。最初の手紙はわたしたち相互の友情と思いに相違がないことを確認するもので、わたしをととても喜ばせました。それに比べると最後の手紙は、喪失の悲しみが彼女の夫とその著作の評価を相当に引き上げてしまつていふという印象を与えました」⁽³³⁾。

〔発見された結婚式説教の原稿について〕

〔今回発見された〕結婚式説教の中から読み取れることは、説教者がマックスとマリアンネの難しい関係を的確に捉えていることである。「あなたがたは知っています。人生の深く重々しい厳しさを。自分自身のありかたの大胆さと臆病さを。あなたがたは夢を見ているわけではありません。そう、きつとあなたがたの愛は現実性の色合いを、生の争いの色合いをあまりに帯びているかもしれません。わたしたちはそれを嘆くべきでしょうか」。ここでは、マックスが婚約以来自分の婚約相手に対してとても距離をとって冷たい態度を取ったことへの、とりわけヘレーネの心配とマリアンネの失望が語られている。そしてまた説教者は、彼が結び付けようとしている二人が、無制約性へと向かってしまうそのつどの各自の意志のうちにあるものをそう簡単には共有することのできない二人の人間であるということも理解していた。「耐えるべきことはたくさんあるでしょう。そしてまさしく成し遂げられるべき忍耐が君たちを形作るでしょう」。

婚礼のための言葉として、オットー・バウムガルテンはコリント人への第一の手紙一三章七節と八節を、すなわちいわゆる「愛の賛歌」からもつとも重要な節を選んだ。それによって説教者は、一族の中で長らく議論を呼んできた「協定によるいとこ婚」あるいは「いとこ同士の結婚³⁴」を愛の結婚であると自分が解釈していることをこれ以上なく強調することができた。それはただ花嫁を思うがゆえに事実に戻すものであったのだろう。しかしマリアンネは確かに喜んだ。『伝記』において彼女は婚礼のための言葉と説教を次のような比類ない一文で伝えている。「学識ある人々も老熟した人々も深い感動に打ち震えた」³⁵。

今回編集された説教においては、オットー・バウムガルテンの手書き原稿ではなく、その写しが用いられている。おそらくは、マリアンネのために整えられた写しであろう。いずれにせよ原文はカリグラフィとして贅沢に書き上げら

れた筆蹟で書かれている。原稿はバイエルン州立図書館のマックス・ヴェーバー・シエーファー遺品 (Ana 446) の中にある。

注

- (1) Marianne Weber, *Max Weber. Ein Lebensbild*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1926, 185. 「マリヤンネ・ヴェーバー (大久保和郎訳)、『マックス・ヴェーバー』、みず書房、一九六三年、一三九頁」
- (2) Günther Roth, *Max Webers deutsch-englische Familiengeschichte 1800–1950, mit Briefen und Dokumenten*. Tübingen: Mohr Siebeck, 2001, 540. より引用。
- (3) Marianne Weber, *Lebensbild* (wie Anm. 1), 186f. 「前掲邦訳書一四〇頁」
- (4) Max Weber, Die Erhebung des Evangelisch-sozialen Kongresses über die Verhältnisse der Landarbeiter Deutschlands, in: *Die christliche Welt. Evangelisch-luthersches Gemeindeblatt für Gebildete aller Stände*. Leipzig, Nr. 23 vom 1. Juni 1893, Sp. 535–540, kritisch ediert in: Max Weber, *Landarbeiterfrage, Nationalstaat und Volkswirtschaftspolitik. Schriften und Reden 1892–1899*, 1. Halbband, hg. von Wolfgang J. Mommsen in Zusammenarbeit mit Rita Aldenhoff (= Max Weber Gesamtausgabe Abteilung I: Schriften und Reden, Band 4, 1. Halbband). Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1993, 208–219, 217.
- (5) マックス・ヴェーバーは一八三一年一月九日に、もともと可愛がっていた一番下の妹であるクララに宛てて次のように書いている。「クララちゃん! 「中略」これでうまくやって、できるだけ早くお手紙を下さい。そうすれば、わたしはまた君に何かを話します。つまり、当地ではかなり多くのことがありますし、君がとても驚くような重大事が起こりつつあるとおもわれます。それはわたしやわたしたちの一人にかんしてではありませんが、君はかれを彼女と同様に二人とも

とてもよく知っています。しかし、し！し！し！！し！！そうでなければ、わたしは君にもう二度とこの秘密を話しません。近々、おそらく君にそのことを書きます！草々 君のマックス」。この手紙は以下に見出せる。Eduard Baumgarten, *Max Weber, Werk und Person*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1964, 83. [訳注―訳文は以下を用いた。マリアンネ・ウェーバ編、阿閉吉男・佐藤自郎訳、『マックス・ウェーバー 青年時代の手紙 下』、勁草書房、一九七三年、四二〇―四二二頁]

(6) Günther Roth, *Familiengeschichte* (wie Anm. 2), 540.

(7) Marianne Weber, *Lebensbild* (wie Anm. 1), 187. エミー・バウムガルテンは当時、やはり病んでいた妹であるアンナと一緒にシュトゥットガルトのいわゆるオッティリーオンハウスで暮らしていた。そこは医学的な指導を受けることのできる療養所の一つであった。マックス・ヴェーバーはほんのつかの間だけエミーと会っただけであるように思われるが、この訪問については彼が母親に宛てて一八九二年九月一日日に書き送っている。この手紙は以下に見出せる。Eduard Baumgarten, *Max Weber* (wie Anm. 5), 81f.

(8) イーダに対するオットーの報告は以下で明らかにされている。Günther Roth, *Familiengeschichte* (wie Anm. 2), 695.

(9) この日付確定は以下の文献による。Jochim Radkau, *Max Weber. Die Leidenschaft des Denkens*. München: Hanser, 2005, 82. とはいえ、一八九三年一月二七日付けのクラウラ・ヴェーバー宛の手紙がこの日付確定とは緊張関係にある。そこにはこう書かれている。「わたしのような、こんな年老った一匹の熊は、自分の檻の中で精々うろつくだけです」。この手紙は以下に見出せる。Eduard Baumgarten, *Max Weber* (wie Anm. 5), 83. [前掲『マックス・ウェーバー 青年時代の手紙 下』、四二三頁]

(10) マリアンネは伝記の一八七―一九〇頁〔邦訳一四一―一四三頁〕においてこの自分に宛てられた手紙、すなわち徹底的に自己中心的な考え方の資料を提供している。伝記的な方向性を持つヴェーバー研究で、怒濤や荒海という隠喩の解釈を試みないものはほとんどない。「娘がこの手紙を読んだとき、名状し得ぬもの、永遠なものが彼女の心を打揺るがした。彼女はそれ以上何も望んでいなかったのだ。爾後彼女の生活は、この瞬間に贈られたものに対する絶えざる感謝の供え物となるべきはずだった」。Marianne Weber, *Lebensbild* (wie Anm. 1), 190. [邦訳一四三―一四四頁]

(11) Günther Roth, *Familiengeschichte* (wie Anm. 2), 542.

- (12) Aao, 1995f: ロートに従い引用したが、一部の読み方は変更している。
- (13) Marianne Weber, *Lebensbild* (wie Anm. 1), 197. [邦訳一四九頁]
- (14) Aao, 198 [邦訳一五〇頁]
- (15) Aao., 197 [邦訳一四九頁]
- (16) Aao., 201 [邦訳一五二頁]
- (17) Joachim Radkau, *Die Leidenschaft des Denkens* (wie Anm. 9), 86ff.
- (18) Marianne Weber, *Lebensbild* (wie Anm. 1), 201. [邦訳一五二頁]
- (19) Aao., 201f. [邦訳一五二―一五三頁]
- (20) Aao., 202. [邦訳一五三頁]
- (21) Ingrid Gilcher-Holey, Max Weber und die Frauen, in: Christian Gneuss/Jürgen Kocka (Hg.), *Max Weber Ein Symposium*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 1988, 142–154; Günther Roth, Marianne Weber und ihr Kreis. Einleitung, in: Marianne Weber, *Max Weber. Ein Lebensbild*. München: Piper, 1989, IX–LXXII; Lietke Van Vucht Tjissen, Women and objective Culture: Georg Simmel and Marianne Weber, in: *Theory, Culture and Society* 8 (1991): 203–218; Marion Borchert/Stephan Buchholz, Marianne Weber—Porträtstudien zu Person und Werk, in: Stephan Buchholz u. a. (Hg.), *Überlieferung, Bewahrung und Gestaltung in der rechtsgeschichtlichen Forschung*. Paderborn: Schöningh, 1993, 23–52; Theresa Wobbe, Von Marianne Weber zu Edith Stein: Historische Koordination des Zugangs zur Wissenschaft, in: Theresa Wobbe/Gesa Lindemann (Hg.), *Denksachen. Zur theoretischen und institutionellen Rede vom Geschlecht*. Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1994, 15–68; Tilman Allert, Die Gefährtenreihe. Max und Marianne Weber, in: Hubert Treiber/Karol Sauerland (Hg.), *Heidelberg im Schnittpunkt intellektueller Kreise. Zur Topographie der „geistigen Geselligkeit“ eines „Weltorfes“ 1850–1950*. Opladen: Westdeutscher Verlag, 1995, 210–241; Marion Borchert, Marianne Weber, in: Adalbert Erler/Ekkehart Kaufmann (Hg.), *Handwörterbuch zur deutschen Rechtsgeschichte* Bd. 5. Berlin: Schmidt, 1995, 1168–1170; Theresa Wobbe, On the Horizons of a Discipline. Early Woman Sociologists in Germany, in: *Journal of the Anthropological Society of Oxford* 26 (1995) Nr. 3: 283–297; Günther Roth, Marianne Weber als Liberale Nationalistin, in: Jürgen C. Heß/Hartmut Lehmann/Volker Sellin in Verbindung

mit Dettel Junker/Eike Wolgast (Hg.), Heidelberg 1945 (Transatlantische Historische Studien. Veröffentlichungen des Deutschen Historischen Instituts Washington, DC Bd. 5). Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1996, 310–326; Theresa Wobbe, *Wahlverwandtschaften. Die Soziologie und die Frauen auf dem Weg zur Wissenschaft* (1890–1933). Frankfurt am Main/New York: Campus, 1997; Theresa Wobbe, Marianne Weber (1870–1954). Ein anderes Labor der Moderne, in: Claudia Honnegger/Theresa Wobbe (Hg.), *Frauen in der Soziologie. Neun Porträts*. München: C. H. Beck, 1998, 153–176; Theresa Wobbe, Ideen, Interessen und Geschlecht. Marianne Webers kultursoziologische Fragestellung, in: *Berliner Journal für Soziologie* 8 (1998): 105–123; Theresa Wobbe, Georg Simmel and Marianne Weber: Elective Affinities between Sociological Classics and Feminist Politics, in: Anne Witz/Barbara Marshall (Hg.), *The Masculinity of the Social Sciences*. London: Open University Press, 2003, 54–68; Bärbel Meurer, *Marianne Weber. Beiträge zu Werk und Person*, Tübingen: Mohr Siebeck, 2004. 次の文献はこのうち重要である。Edith Hanke, „Max Webers Schreibisch ist nun mein Altar.“ Marianne Weber und das geistige Eigentum ihres Mannes, in: Karl-Ludwig Ay/Knut Borchardt (Hg.), *Das Faszinosum Max Weber. Die Geschichte seiner Geltung*. Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft mbH, 2006, 29–51. 特に「エルンスト・トレルチもほとんどの行程をともにした」マックス・ヴェーバーとマリアンネ・ヴェーバーのアメリカ旅行（一九〇四年）については以下の文献を参照。Lawrence Scaff, The ‘cool objectivity of sociation’: Max Weber and Marianne Weber in America. *History of Human Sciences* 11/2 (1998): 61–82; Günther Roth, Europäisierung, Amerikanisierung und Yankeeum. Zum New Yorker Besuch von Max und Marianne Weber 1904, in: Wolfgang Schulcher/Friedrich Wilhelm Graf (Hg.), *Asketischer Protestantismus und der ‚Geist‘ des modernen Kapitalismus. Max Weber und Ernst Troeltsch*. Tübingen: Mohr Siebeck, 2005, 9–31.

(22) すでに何度も書名を挙げているギュンター・ロートの家族史的研究は基礎的なものであると同時に、わけてもこれまで知られていなかった数多くの資料が載っていることにより魅力的なものである。ヨアヒム・ラートカウの大著ははるかに少ない説得力しか持っていない。

(23) Günther Roth, *Familiengeschichte* (wie Anm. 2), 547.

(24) Christa Krüger, *Max & Marianne Weber. Tag- und Nachtansichten einer Ehe*. Zürich und München: Pendo, 2001, 60. 「クリスタ・クリューガー（徳永恂・加藤精司・八木橋真訳）『マックス・ヴェーバーと妻マリアンネ 結婚生活の光と影』、新曜社

二〇〇七年]

- (25) Joachim Radkau, *Leidenschaft des Denkens* (wie Anm. 9), 28f.
- (26) すべて引用は以下からとした。Günther Roth, *Familiengeschichte* (wie Anm. 2), 696–698.
- (27) Hasko von Bassi, *Otto Baumgarten. Ein „moderner Theologe“ im Kaiserreich und in der Weimarer Republik* (Europäische Hochschulschriften. Reihe XXIII: Theologie Bd. 345). Frankfurt am Main/Bern/Paris: Peter Lang, 1988, 17.
- (28) Aao., 18.
- (29) 伝記に対するバウムガルテンの書評の本文と、それと関係する、名前の知られていない読者と交わられた書簡は以下の文献の補遺に収められている。Friedrich Wilhelm Graf, *Fachmenschenfreundschaft. Studien zu Weber und Troeltsch* (Troeltsch-Studien Neue Folge; 3). Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2010 (印刷中)。同じ雑誌(『キリスト教世界』)でマリアンネはバウムガルテンが彼女の『伝記』を論評してから四年後に、バウムガルテンの自伝を書評した。Vgl. Marianne Weber, *Otto Baumgarten als Theologe und Politiker*, in: *Die Christliche Welt* 44 (1930), Spalte 161–165.
- (30) Anonym, Professor Max Webers Feuerbestattung, in: *Münchener Neueste Nachrichten*, Nr.244, 18. Juni 1920, Morgen-Ausgabe, 3.
- (31) このことは次の追悼冊子から明らかになる。Frau Thekla Siebeck zum Gedächtnis, 16. Juni 1919, Tübingen, 1919。otto・バウムガルテンは家でも墓前でも演説をし、otto・シェールが別れの挨拶をした。
- (32) Postkarte Otto Baumgartens an Paul Siebeck vom 30. Juni 1920, Verlagsarchiv Mohr Siebeck A 391 1920。「隣人」という言葉で講壇社会主義的国民経済学者ロバート・ヴィルブラントのことが意味されている。ヴィルブラントは一九〇八年からチュービンゲンで教えており、シユタウエン通りのジーンベックの家のすぐ隣に暮らしていた。
- (33) Ebd.
- (34) Günther Roth, *Familiengeschichte* (wie Anm. 2), 540.
- (35) Marianne Weber, *Lebensbild* (wie Anm. 1), 201.